

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Chieftainship and Land Tenure : Chieftainships in Micronesia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 昭俊 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003731">https://doi.org/10.15021/00003731</a>

## 第 2 章

### 首長制と土地所有の諸相



パラオの首長

(George Keate, *An Account of the Pelew Islands*, 1788 より)

## ミクロネシアの首長制

清水 昭 俊\*

- |                            |                    |
|----------------------------|--------------------|
| I. 序                       | 2. 平等的形態にもとづく首長制事例 |
| 1. ミクロネシア文化——概観            | III. 集中的首長制        |
| 2. ミクロネシアの首長制のための理論的<br>枠組 | 1. 一般的特徴           |
| II. 「同等者中の第一人者」的<br>首長制    | 2. 集中的形態にもとづく首長制事例 |
| 1. 一般的特徴                   | IV. 結 論            |

### I. 序

#### 1. ミクロネシア文化——概観

一つの文化領域として見るならば、ミクロネシアは奇妙な位置を占めている。文化要素の分布模様は不揃いで、ミクロネシア内部の幅広い多様性の方が目立つ。ポリネシア、メラネシアとは対照的に、ミクロネシアは内的な文化的統一性を欠いている。たとえば言語的に、ミクロネシアの諸言語はおおまかに3群に分けられる。そのなかで、ベラウ語・チャモロ語からなる1群は西マラヨ＝ポリネシア（ヘスペロネシア Hesperonesian）語群に、中央カロリンからマーシャルにいたる地域の諸言語からなる1群は東マラヨ＝ポリネシア（オセアニア Oceanic）語群に属す。つまり、ミクロネシアの諸言語はマラヨ＝ポリネシア（Malayo-Polynesian）語族内の2語群に分属している。さらに、残る1群にあたるヤップ語の系統ははまだ明かではない [BLUST 1981]。物質文化については、一層のモザイク的な分布様態が観察される。あるものは、中央および東カロリンの織布技術のように [RIESENBERG and GAYTON 1952]、インドネシア起源と考えられ、あるものはメラネシアに近似し（ベラウ、ヤップの貨幣など）、さらにポンペイの食用犬のように、ポリネシアと共通する要素も見出される。肯定的視点に立っても、ミクロネシアの文化は混合文化（Mischkultur [TISCHNER 1959]）と認めるほかはない。通文化的な視点から懐疑的に見るならば、ミクロネシアが一つ

\* 広島大学総合科学部

の単位をなしているか否かを疑うことができる。事実、大林 [OBAYASHI 1987] は東南アジアおよびオセアニアの文化クラスターの分析から、ミクロネシアの諸文化は「ミクロネシア」(proper Micronesian) および「ポリネシア」(Polynesian) の2文化群に分類すると結論している。

## 2. ミクロネシアの首長制のための理論的枠組

政治形態においてもまた、ミクロネシアは幅広い変異を見せる。政治的統合形態をバンド、部族、首長制、国家の4類型に分類する理論的枠組 [SERVICE 1962] にそって、ミクロネシアの政体 (polity) はいずれも「首長制」(chieftainship) ないし「首長国」(chiefdom) との見出し語のもとに記述されてきたが、相互の差異は大きく、「首長制」概念に含めうる変異幅の全体におよんでいるとみなすことができるほどに多様である。ベラウとコシャエの2事例が、ミクロネシアの政治形態の質的な多様性を典型的な形で示している。コシャエの政体が「首長制」よりもむしろ「王制」(kingship) の語感により適合するのにたいし、ベラウの政体は平等制と階層制という、たがいに異質な特徴の奇妙な組合せからなりたっているようにみえる。

ミクロネシア各地の政治形態はいずれも、他の島の政治形態に容易に還元しうるものではないが、相互間の遠近関係を測定することは可能である。仮にベラウとコシャエを2つの基準点とみなすならば、ベラウに比較的近い形態としてヤップがあげられ、この2つの社会との相対で、ウリシーからマーシャルまでの諸地域を、相互に近い一群としてまとめることができる。このようにして、ミクロネシアは政治形態において少なくとも2つのグループに大別される。この2グループはそれぞれ、ミクロネシアで地理的に合流した2つの異なる文化的伝統を代表するものであるのかもしれない。そうであるならば、2グループのあいだを通約する文化的特徴を期待することはできない。しかしながら、この2グループは歴史的に、たがいに対しまったく外的ではなかった。中央カロリンの環礁群はコシャエ・グループの最西端に位置するのであるが、ベラウ・グループに属すヤップ島の政治組織のなかに統合されていた。ミクロネシアを2分するグループ間のこの——文化史的ではないにしても——機能的な連続性こそが、私がここでミクロネシアの諸政治形態を単一の理論的視野のもとに考察する根拠である。本稿では、ミクロネシア諸地域の政治的変異を解釈するための、分析的な枠組の提示を試みることにする。

考察の便宜上、ミクロネシアを政治組織の面で比較的共通性の高い地域に区分するならば、西から東に(1)ベラウ、(2)ヤップ、(3)マリアナ、(4)中央カロリン(ウリシーか

らプルワット、プルスク、ボンナップにいたる環礁群)、(5)トラック環礁、(6)ポーンペイ、(7)コシャエ、(8)マーシャル、(9)北部ギルバート、および(10)南部ギルバートの10地域に分けることができる。民族誌的資料の制約から、本稿では(3)マリアナと(10)南部ギルバートを除く8地区の政治形態を分析しよう。

先に識別した2グループのいずれにあっても、それに属す諸政体のあいだの差異は少なくない。それゆえ、どのレベルにも観察される多様性を、進化論のような一線的配列の枠組で理解することは適切ではない。それにかわるものとして、ここでは2グループのそれぞれに対応する2つの形態(configuration)を想定したい。この2つの形態は、それぞれ対応するグループに属す諸政体の主要な特徴を解釈する能力をそなえたものとして構想されよう。いずれの形態も、特定の政体の特殊かつ具体的な組織様態を直接に解明するものではないが、特定の政体について何が特徴的であるかを指摘する能力はそなえており、それゆえ個々の政体について、同じグループの他の諸政体、あるいはさらに他グループの諸政体との異同を測定することを可能にしよう。この2つの形態とは、(1)平等的な「同等者中の第一人者」(*primus inter pares*) 的首長制、および(2)集中的首長制である。

## Ⅱ. 「同等者中の第一人者」的首長制

### 1. 一般的特徴

すでに述べたように、この形態のきわだった特徴は、平等制と階層制という対照的な特質の組合せにある。平等制の観点では、この形態に属す首長制はきわめて部族社会に近い——たとえば分節的な社会構成、この社会構成上のどの分節レベルの集団にも見られる基本的な自立性ないし独立性、同格の集団のあいだに顕著な力の均衡と競争、経済的取引の主要な形態としての、儀礼的機会に顕示的に行われる財の相互制的(reciprocal)交換、など。同時に、階層制の観点からは、社会のどの分節レベルにおいても、社会組織の構成単位は序列づけられている。この序列のシステムはしかしながら、平等制の原則を崩すものではない。序列の差異は相対的なものでしかなく、下位の者(集団)は上位者との競争をとおして、その位置を高めることが可能である。政体全体の階層構造を記述する概念としては、たしかに「首長制」が適切である。しかしながらこの形態の首長制は、地位の差異そのものにもとづくシステムではなく、同等者(集団)のあいだの競争をとおして分化した序列の複合的な構成体である点で、きわめて特異である。

この平等的形態における最小の自立的な政治的団体は村落レベルに見出される。村落はさらに団体的 (corporate) 性格の親族集団からなる。それはベラウでは準母系的複系<sup>1)</sup>、ヤップでは父系の出自形式にそって、それぞれ構成されている。この親族集団は機能上の性格は家内的でもあり、「家」<sup>2)</sup>と記述することが可能である。家は社会生活のための必要条件——屋敷・家屋・耕作地などの家産、漁撈権、序列上の地位と称号その他の政治経済的特権、など——の大部分を自らの名前において所有する。ここで扱う首長制の形態をシステム全体として平等制にもとづくものと私がみなすのは、これら家内的経済の基礎的条件の平等を重視するからである。しかしながら、これら平等なかつ自立的な経済条件にもかかわらず、一つの村のなかの家々は微細な差異の序列へと配列される。村落は家々のあいだの序列の差異を組み込んだ共同体である。村落をこえた規模の政治模様は、村落を雛型としたその拡大版として構成される。ただし、村落より規模の大きな団体的集団は組織されず、関係のネットワークとしてのみ組織されよう。

## 2. 平等的形態にもとづく首長制事例

平等的首長制、つまり首長制の一つの形態として、共通に示しうるのはこの地点までである。ベラウとヤップでは、村落の組織形態が異なり、それにもなって村落をこえた規模の組織形態もおのおの独自である。

### (1) ベラウの政体<sup>3)</sup>

ベラウ人は村落組織について明確な理想的モデルを概念化している。それによれば、村は10の家 (*keblül*) からなるべきであり、それらは一線的に第1位から第10位まで序列づけられる。家々を代表する長 (*rubak*) が、村落の政治的意志決定機関である合議体 (*klobak*) を構成する。この会議は第1位および第2位の家の長が事実上主導する

1) ベラウでは、人は母方の集団に十全の資格で帰属するが、副次的に父方の集団にも帰属することができる。このような帰属方式では、集団の主体は女性のあいだに男が散在する「準母系」(quasi-matrilineal) 的系譜形態によって構成され、さらに男子成員の子供が二次的に付属する。このような出自形式は、父系的に傾斜するポリネシアなどの「複系」出自 (ambilineal descent) の、男女をいれかえた反転図であり、「準母系的複系」と概念することができる [清水 1985]。

2) 「家内的」domestic、および「家」の概念については清水 [1987] を参照。「家」に該当する英語は house、ないし広義の family と考えるが [清水 1987: 56]、より記述的には corporate kin group でもよい。ベラウ、ヤップいずれの社会でも、親族による集団構成は多層的であるが、とりわけ政治組織との関連で機能上重要なのは団体的かつ家内的集団であり、それは上記の「家」概念の要件を満たしている。

3) 以下のベラウ政治組織の記述に用いる民族誌的資料は、青柳 [1982, 1986]、杉浦 [1938a, 1938b]、Krämer [1919]、Parmentier [1984] によった。本稿のテーマの性格から、いわゆる民族誌的現在における、政治体系の伝統的な、あるいは純粋にベラウ的な側面を記述分析する。他の事例についても同様である。

表1 村の構成例

「半」	「隅」	所属する家々
I	1	1, 5, 9, 12, 16, 20
	3	3, 6, 10, 14, 17
II	2	2, 8, 11, 13, 18
	4	4, 7, 15, 19

【杉浦 1938b: 110 の表2より。ただし若干の補正を加えた】

のであるが、それは次のような背景による。村の社会的空間は2つの「半」、4つの「隅」に区分される。10の家々はこれら区分に、区分それぞれの力関係がバランスを逸しないよう、理想的にはきわめて体系的に配分される。表1に示す事例は、第11位以下の家が村に加わっているなど、理想的モデルからの逸脱を含んでいるものの、2「半」および4「隅」のあいだの力関係が巧みに、バランスと若干の差異を保持するよう構成されているさまを、よく例示している。先に言及した2人のリーダーはそれぞれ、たがいに對抗する2つの「半」を代表し、村の会議では事実上支配的な権威を発揮する。経済的には彼らに従属する家々とほぼ同一の基盤に依存しているのであるから、彼らの権威を支える要因として、村落を二重に2分するシステム以外のものを想定することは困難である。ベラウの村落は、2つのライバル集団のあいだの對抗と競争が、基本的に平等な成員からなる集団にあっても、政治的なリーダーシップと権威を発達させるメカニズムを示唆するものである。このようなリーダーは、その性格上、「同等者中の第一人者」と認められる。

対立する2つの同等集団のあいだの力の均衡のパターンは年齢集団の制度においても再現される。村の成員は男女別、老・壮・青の世代別に組織される2つの集団のいずれかに所属する。つまり、一つの村は男女おのおの6集団からなる年齢集団の体制をもっている。各家は、同じ世代の相対抗する2集団の勢力が均衡するよう、慎重に双方の集団に成員を配分して送り込んだと報告されている【杉浦 1938a】。

村の中で家よりも大きな規模の集団的参加を要する集会的行為は通常、同格の集団のあいだに配分され、各集団は分担分の遂行をたがいに競う。家々間では相互制的なかつ競争的な贈与の交換がおこなわれる。青柳【1986】は村落の理想的モデルで上位を占めるべきとされている家々と、現実に上位を占めている家々とが一致しないという「機構的混乱」を、調査したほとんどすべての村に見出しており、それは偶然的なものではなく、村を2分、4分する区分間の均衡を保つ、構造的な工夫であると述べている。このような構造的な「混乱」が作用する前提として、当然のことながら、家々

間の競争的対抗によるモビリティを見なければならぬ。さまざまな分野で観察されるこの競争への強い傾向は、経済の分野においてもまた、よく知られた貨幣のシステム [RITZENTHALER 1954] へと結晶している。

ベラウは、全島を2分する軍事陣営のシステムでもまた、よく知られている。各陣営はいわゆる「大首長」(paramount chief) によって統括されている。この陣営は団体的性格の集団であるよりはむしろ、政治的同盟のネットワークと考えるべきであろう。ただしこの2大陣営が全島の規模の政治組織のすべてなのではない。ベラウは地理的にまず東西2地方に分けられ、各地方はさらに南北の亜地方に2分される。村より上の分節レベルとして、ベラウはかつて10の区分——杉浦 [1938a, 1938b] が「大村」と記したもので、今日の行政組織上の州 (state) に相当する——からなっていたが、この10「大村」はそれぞれ、上記の全島の2「半」・4「隅」の地理的区分に配分される。各「大村」内の村々のあいだにも序列の差異が識別され、最高位の村の第1位の家の長が「大村」の首長とされ、かくして10の「大村」の首長が集的に「ベラウ首長会議 *rubakl Palau (Belau)*」と認識されていた [KRÄMER 1919]。この会議を主宰するのは、ベラウの2「半」——つまり2大陣営——を代表する2人の「大首長」である。全島規模の政治模様が村落と全く同じ構造のうに構成されていることが分かる。換言するならば、全島規模の「大首長」といえども、村落のリーダーと同様の「同等者の中の第一人者」であって、両陣営の対立からその権威が強化されたとしても、この概念の範囲から出るものではない。

## (2) ヤップの政体<sup>4)</sup>

ヤップの全島的な政治組織の構成はベラウのそれによく似ている。ヤップは伝統的に12地区に区分されており、それは今日のヤップ州の行政組織における、州に次ぐ地方自治体 *municipality* に相当する。各地区は村落の集合体であり、この村落が政治組織を構成するもっとも基本的な自律的単位であった。村はさらに家内的な団体、家 (*tabinaw*) から成る。ヤップはベラウ以上に複雑な序列の制度を発達させている。序列は清浄と汚れの観念を軸とする価値尺度で計られ、地区のなかの村々、一つの村のなかの家々、そして村社会および家のコンテクストにある諸個人は、それぞれ清浄と汚れの価値にそって序列づけられる。村落の政治は3人の首長を中心に展開されるのであるが、この3首長の構成は家の成員構成をモデルとしている。つまり、引退した老父に相当する「村の長老」、家を現に担っている家長に相当し、家長を集めた村会議に足場を置く「村の首長」、そして家の実労働の主力を担う若者たちを村レベルで

4) ヤップの民族誌的資料は Lingenfelter [1975], 牛島 [1987] によった。



統括する「若者の口」(若者頭)。

ベラウの場合と同様、村落レベルのシステムはヤップ全体の規模で再現される。ヤップ全体についても3人の「大首長」(paramount chief)が並立し、そのうちの「村首長」と若者頭に相当する大首長がそれぞれ、ヤップを分ける2大陣営を率いている。他方、一つの地区内で序列づけられた村々のうち、第1位および第2位の村はかならず、「村首長」相当ないし若者頭相当のいずれかに格づけられる。陣営を率いる2人の「大首長」自身、それぞれ所属する地区の最上位の村——それは一方は「村首長」格、他方は若者頭格である——の「長老首長」でもある。つまり村、地区、ヤップ全島の3層にわたって、相似形の構成が繰り返されているのであり、この相似形の構成にそって、複雑な政治的同盟のネットワークが張りめぐらされる。

地区の最上位の村が「村首長」格であれば、その地区は「村首長」格の「大首長」と同盟する。若者頭格の「大首長」は、若者頭格の村が最高位であるような地区を同盟へと編成する。ただし、このように「大首長」に同盟するおのおの地区は、決して一枚岩の統合体ではない。ある地区の最高位の村が「村首長」格(あるいは逆に若者頭格)であれば、第2位の村はかならず若者頭格(「村首長」格)である。つまり、陣営を率いる各「大首長」は、敵に同盟する地区内の第2位の村とは同盟する条件にあり、事実、敵陣営に属す地区の第2位の村とも、おおむね秘密の連絡回路「道」(tha)を保持している。さらにこの同盟の連絡網は、敵側の村にある自己側の家——若者頭格の「大首長」についていえば若者頭の家——にも通じており、それは相手の「大首長」の所在する村の内部にまでおよんでいた。このような複雑な政治的同盟の展開の結果として、双方の陣営と同盟していた村も少なくない。

敵陣営の動静は、末端の地位の低い村での出来事であれ、「道」の連絡網をとおして最上部へと伝えられ、しかも「大首長」は対抗する「大首長」の膝元にある自己側の村や家との「道」を介して、間接的に相互に連絡を保っていた。「大首長」たちは武力的対立の情報をいちやくキャッチして、起こるべき戦闘のシナリオをあらかじめ決めることができ、それゆえ村落などのあいだの戦争は常にコントロールされた局地戦に終って、2大陣営の総力戦に発展することはなかったという[LINGENFELTER 1975]。2大陣営のあいだの力の均衡が常に保たれるこの「ヤップの平和」ともいうべき状況は、量的規模においては比較にならない格差があるものの、奇妙にも現代の世界政治の構成を想起させるものである。国際政治の動態は東西2大陣営の対立を軸としているものの、決してこのレベルでの対立に終始するのではない。各陣営は相手陣営と親近な国家をも成員としており、さらに各国家内部の態勢も、おおむね、東

西の対立と相似的な複数の勢力のあいだの微妙なバランスの差のうえに成立している。ヤップの「道」の連絡網と類似のコミュニケーションのネットワークが、陣営・国家・政党・個人の各層にわたって縦横に展開し、結果として、東西の両盟主は、相手陣営との対立に共通の利益を見出し、それを事実上、共同で享受している。現代の世界政治は「ヤップの平和」のカリカチュア版ともいべきものでもある。

民族誌家たちは、社会のいずれの分節レベルにおいても、同等者（集団）のあいだの顕著な競合・競争の傾向を指摘している——村の中の家々間、小字（村の小区分）のあいだ、3人の首長のあいだ、地区内の村々のあいだ、そしてヤップ全体規模での2陣営のあいだ、等々。競争は経済的に、財の儀礼的かつ相互制的贈与交換によって、あるいは軍事的に、戦闘（戦争）によっておこなわれた。ベラウのものよりもはるかに知られたヤップの石貨、貝貨のシステムは、この競争の歴史的な所産である。社会のさまざまな分節レベルでの序列は、清浄と汚れとの宗教的な観念で表現されたが、上記の競争を反映して変動可能であって、決して固定的ではなかった。ヤップの「大首長」の権威と権力は、ポーンベイおよびマーシャルの首長のそれに匹敵するものと見ることができるかも知れない。しかしながら、その拠って立つ政治組織がいかに複雑であれ、ヤップの「大首長」の地位と権威は同等者のあいだの競争の所産、その複合的な構成物なのであって、決してその範囲を出るものではない。

### Ⅲ. 集中的首長制

#### 1. 一般の特徴

コシャエの政体に近い特徴をもつ一群の政体は、ベラウ、ヤップの政体とも類似する点が少なくない。しかしながら、この類似性にもかかわらず、同グループの諸政体は最終的に、一つの共通な、しかし平等的形態とは明確に異なる形態の、諸変異形と結論することができる。

この第二形態の首長制は第一形態の政体に比べ、はるかに大規模な人口を統合することができる。なかには、後述のように、30以上もの集落を統合する首長国も観察される。首長制の第二形態は、一点への権威の集中に基礎をおいており、民族誌では通常、この権威の集中する一点に位置し、その権威下の領域（つまり首長国）を統治する首長を、「最高首長」(paramount chief) と称している。

この首長制を支えるのは首長の権威を正当化するイデオロギー、および特定の経済的要素である。正当化イデオロギーは宗教的、世俗的のいずれの形態もとりうる。し

かしこの差異にもかかわらず、いずれのイデオロギーも共通に、首長を人民の社会的・経済的生活の統合点に位置するものとして描き出す。コスモロジカルなイデオロギーの場合には、首長を神々と人間（つまり首長の統治下の臣民）とのあいだの宗教的媒介者として描き出し、それゆえに首長に権威を付与する。自然と人間を最終的に支配する神々にたいし、首長は彼の全臣民を代表する。臣民のおかず瀆聖行為のすべてについて、首長は責任を負わねばならない。それと同時に、首長は神々にかわってその聖なる権威を臣民に行使する。首長の権威はしばしば「絶対」であると信じられている。

他方、世俗的なイデオロギーの場合には、名誉と威信——人々がその社会生活を制御する社会的な価値——を独占的に首長に集中させる。首長と臣民とのあいだの政治的な相互行為はそうじて、臣民が首長に表敬するもっとも名誉ある機会として編成される。集中的首長制は、敬語を含む洗練された様式的表敬行為（つまり作法）の体系をとめない、しかもさまざまな行為による敬意の表現は最終的に首長という一点に集中するべく編成されている。

集中的首長制にともなう経済は、一定の土地制度を包含しており、それが首長国の構成員のあいだに、階級的差異ではないとしても、地位の分化をもたらす。この土地制度に依拠しつつ、財の流れは首長を中心とする再分配のシステムへと編成される。しかしながら、この再分配経済は直接それとして機能するのではなく、多かれ少なかれ首長制を支えるイデオロギーをとおして表現され、実行される。首長と臣民との経済的關係は、首長位を支えるイデオロギーが宗教的性格の強いものであるか、あるいは世俗的なものであるかに応じて、大きく変異する。コシャエにおけるように、イデオロギーが首長の超自然的権威を強調するならば、首長はより専制的な形で臣民を搾取しよう。ポーンペイにおけるように、首長が名誉の価値により依存するならば、首長の経済的特権は実質的であるよりはむしろ象徴的であろう。

## 2. 集中的形態にもとづく首長制事例

### (1) トラック環礁および中央カロリンの政体<sup>5)</sup>

この地域の政体は「首長制」概念の境界に位置する事例と見做すことができる。ことにトラックにおいては、政治的に自立する基本的単位は村落であり、極小レベルにとどまる。村は家からなる。この家は母系リネジの成員と、妻方居住によって婚入し

5) トラック、中央カロリンの民族誌的資料は Alkire [1965], Goodenough [1966], Lessa [1950], 須藤 [1984], 牛島 [1987] によった。

てきた男たちから構成されるのが原則であるが、状況におうじて、妻をつれかえった男子成員と、彼の妻の母系子孫をも含むことができ、すくなくとも割合で準母系的構成の家が見られる。民族誌は村を政治的に代表する地位にあるものを「首長」(chief)と記述するが、その機能は統治者であるよりはむしろリーダーである。村人のあいだの紛争に積極的に介入することはない。村の戦略的な決定は常に、すべての村民が参加する寄り合いで下される。このようにして、トラックにおける村と家の状況は、ヤップ、ベラウのそれにほぼ匹敵する。加えて、トラックは村よりうえのレベルでの同盟組織を発達させることはなかった。このような外貌からして、トラックの村はアフリカの平等的な部族の村と似ているとさえいえよう。それにもかかわらず、首長と村民との関係はベラウ、ヤップの村におけるそれとはまったく異質であり、この点ゆえにこそトラックの政体は平等的形態の首長制から区別される。

トラックにおいては、土地制度が首長位のイデオロギー的かつ経済的基礎をなす。グッドイナフ [GOODENOUGH 1966] によれば、一筆の土地について2種の地権、つまり残存権 (residual title) および財産権 (provisional title) が区別される<sup>6)</sup>。本稿では前者を一次的地権、後者を二次的地権と称することにしたい。この2種の地権の分化は土地の移譲によって結果し、土地の授与者は一次的地権を、被授与者は二次的地権をそれぞれ保持する。地権の移譲とは常に二次的地権のみの譲渡であるともいいかえることができる。この2種の地権が異なる保持者の手にある場合、相続者を残さずに死ぬなどして、一方の保持者が絶えるならば、生きのびた方が相手の地権を取得し、一次・二次双方の地権を保持する所有者となる。二次的地権者は当該土地を自己の意図に従って用益することができるが、その土地からの収穫の一部を一次的地権者に支払うことを義務づけられる。この支払いは経済的な価値のうえでは軽微である。むしろそれは、一次的地権者の二次的地権者にたいする優位を可視化させる行為である点で、表現的、象徴的である。そしてこの2種の地権者のあいだの経済的關係が、イデオロギー的に首長と村民との政治的關係を表現する言語をも提供する。

類型的なかつ伝承的な歴史は、かつて村の全領域が一つの家産として、草分けの家によって所有されていたと語る。この草分けの家は領域内の土地を区分し、後続の移住者たる家々に譲渡した。村を構成する家々のあいだの政治的關係は、村のこの種の類型的な伝承の歴史のなかに表現を与えられる。草分けの家は村の全領域にたいする一次的地権者として支配的な地位を占め、その他の家々は各々の家産としている土地の二次的地権者として、従属的な地位にとどめられる。この支配的な家の系譜につら

6) 中央カロリンの珊瑚島を扱ったものであるが、土地制度については須藤 [1984] が詳しい。

なる最年長成員（男ないし女）が村の首長位を占める。首長と村人との関係は一次的地権者の二次的地権者にたいする関係と同一であるから、首長の特権もまた象徴的なものにとどまる。首長が社会的な舞台で主役として登場するのは、村人が儀礼的に初物の献上を行なうときに限られる。この初物の献上は二次的地権者が一次的地権者にたいして行なうべき、収穫の一部の支払いに相当する。そしてこの時においてさえ、集められた献上物は村人のあいだに平準的に再分配されるのが常であって、首長と村人との取得の差異を結果しない。首長の第一の機能は、村人の行なう表敬行為を受けることである。

要約すれば、トラックの政体は集中的首長制の象徴的性格を浮き彫りにする。それにもかかわらず、制度の全体は首長を、その權威下にある者のすべてに優越する者として区別する。トラックの事例はミクロネシアにおける集中的首長制の諸事例にたいし、原型ともいうべき位置にあると認めることができる。

中央カロリンの村々における政治組織はトラック環礁のものとはほぼ同一と、見做してよい。ただし、ウリシーからプルワット・ブルスク・ポンナップにいたる環礁・珊瑚島群は、ヤップの二人の「最高首長」のうちの一人を首長とする政治・経済組織、しばしば「ヤップ帝国」と称される組織に統合されていた。ヤップ島内の一地区における村々の首長と同様、中央カロリンの組織における村々の首長は、西方の、つまりヤップにより近い島の首長は東の島の首長より高位にあるとして、線的に序列づけられる。一つの島（ないし環礁）に複数の村がある場合には、この村々のなかで最も格の高い村の首長が島（環礁）全体を代表し、民族誌では島（環礁）の「最高首長」と称される。個々の首長の存立はトラックと類似の集中的首長制でありながら、首長間との関係はヤップのシステムにそっており、その点で島の「最高首長」といえども同等者のあいだの第一人者であって、その權威は同じ島の他の首長の權威を超越するものではない。

## (2) ポーンペイの政体<sup>7)</sup>

トラックの首長制に、より精緻な宗教的および世俗的イデオロギーをつけ加えるならば、ポーンペイのシステムをえることができる。ポーンペイには5つの首長国があり、おのおのは17から38の村落からなっていた。ポーンペイの村の構成はトラックの村とよく似ているが、政治構造上、トラックの村と相同なのはポーンペイの村ではなく、首長国の方である。トラックにおける首長と村民との関係は、ポーンペイにおい

7) ポーンペイの民族誌的資料は Riesenbergl [1968], 清水 [1982, 1985, 1987a], および筆者による実地調査のデータによる。

では首長と村々のあいだに再現される。ポーンペイの首長制は、村よりも上のレベルで統治的中枢部を組織している点で超越的である。(これにたいし、ベラウ、ヤップの「最高首長」は同時に、自己の居住する村の首長も兼ねる。)

ポーンペイのイデオロギーによれば、この中枢部の構成員は、首長国のその他の成員(つまり平民)とは非連続的な身分関係にある。とりわけその頂部を占める2人の最高首長の権威は「絶対」とされている。中枢部内の序列構成は、中枢部と平民とのあいだのこの非連続性の弁証法的な展開として解釈することができる。集合的に「首長」(*sohpeidi*)と称される中枢部は、その超越的性格ゆえに、平民と関係を持つためには媒介者を必要とする。相対立する二者を媒介するためには、媒介者は双方の被媒介者いずれの属性をも、部分的にせよそなえていなければならない。かくして、首長たちの代理者は首長との関係では平民を代表し、平民との関係では首長を代表する。換言すれば、媒介者は必然的に、首長を平民から隔てる非連続性、そして彼が媒介しようとする非連続性を、彼と首長とのあいだに構成する。この非連続性はふたたび新たな媒介者を必要とし、同じ過程が繰り返されることになる。ポーンペイ首長制における首長身分の複雑な分化は、多層的な媒介者を生み出すこの過程によって解釈することができる(図1)。その帰結としてポーンペイの首長国の中枢部は、2人の最高首長、「王」(*Nahnmwarki*)および「副王」(*Nahnken*)を頂く、双分的、二重首長制(*diarchy*)的組織として編成される。中枢部に登用されるのは男のみであり、王、副王には特定の母系リネジの成員のみが、同リネジに固有の親族的な理論による優先

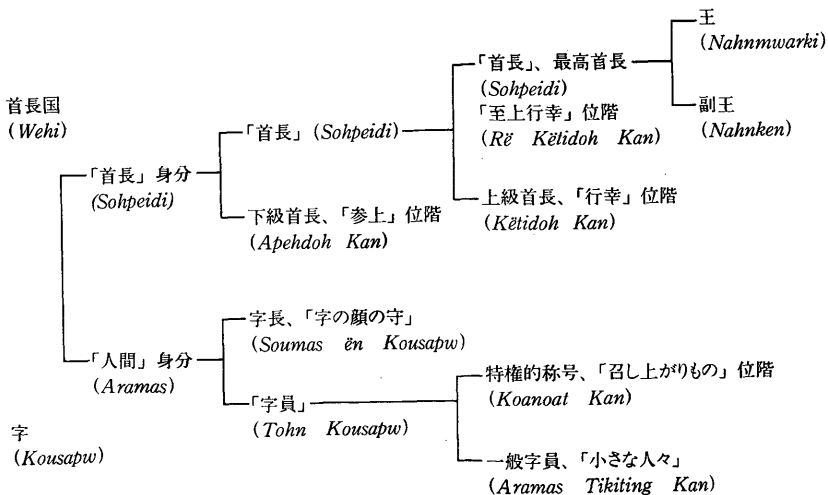


図1 ポーンペイ首長制社会の位階称号構成

順位（後述）に従って任命される。

経済的にポーンペイの首長制はトラックと同一の土地制度に依拠している。王は治下の領土全体の所有者とされる。領土は村に区分され、有力な母系リネジに配分された<sup>8)</sup>。トラックの制度の言葉でいえば、村人はその土地資産にたいして二次的地権を持つ一方、そのすべてにたいし王は一次的地権を主張する。Riesenberg [1968: 27, 32-33]はこの関係を封建制の用語で、王は封建領主、土地を受けるリネジの長は家士(vassal)と解釈している。王は家士として、上級および下級首長のみならず、しばしば有力な平民リネジの長をも任命する。

首長と臣民との経済的関係がトラックでは典型的な村の歴史伝承によって表現されていたのにたいし、ポーンペイにおいては世界観的イデオロギーをとおして表現される。ポーンペイの宗教は神々を全能の存在とは描かないものの、最高首長の絶対的権威を十分に支えてはいる。ことに王は神々と臣民——それは首長国の範囲内に視野を限れば人間全体に等しい——とのあいだの媒介者の位置にある。首長国の領土全体について王に認められた一次的地権は、神々と人間とのあいだの媒介者の役割の経済的表現にほかならない。王は神々を代表し、自然は神々に属すがゆえに、王は可耕地その他の神祕的（ないし自然的）恩恵を臣民に配分するのである。同時に王は神々にかわって臣民からの返礼の贈与を受けとる。初物の献上の形でおこなわれるこの返礼は、トラックの土地制度の言葉でいえば、収穫からの一次的地権者の取り分に相当する。

この王にたいする臣民の初物献上もまた象徴的性格が強く、神々、王、臣民のあいだの世界観的關係を表現することがその主たる機能である。王のこれら宗教的かつ経済的基盤は最高首長に十分の食料を供給するものではない。ただし、最高首長に自発的に食料を献上することは、臣民にとって名誉と見做されているがゆえに、最高首長は自ら労働する必要を事実上免除されている。しかし、その他の上級・下級首長にこの特権はない。

ポーンペイの首長制はいまひとつの権威の基礎として、世俗的イデオロギーにも依拠している。社会的相互行為は全般に、名誉と威信の観念によって規制される。ポーンペイ社会は相互行為の形式的側面——ことに発話、身体の動きと姿勢、行為で用い

8) ポーンペイの伝統的な土地制度を復元することは容易ではない。ドイツ統治の最末期(1912年)に、伝統的形態とは異なる制度が強制的に導入されたからである(詳しくは Ehrlich [1978] 参照)。これによってかつての王による一次的地権は否定され、かつての二次的地権の集団的保有に相当するものとして、一次・二次的地権の双方を統合した形の私的所有権が個人に与えられ、それは長男子が相続すべきものとされた。キチー首長国で私の行なった、系譜をさかのぼっての復元によれば、土地改革当時の村々は、かなりの割合で、母系リネジを中軸とし、それに男女婚入者、男子婚入者の子孫などを加えた、ほぼ準母系的な構成をとっていた。

る道具類など——を、行為者・傍観者のあいだの威信関係について表現的な作法の体系へと精緻に仕上げている。この作法のもとでは、人は常にその行為を、行為の場における彼の位置におうじて制御しなければならない。つまり人は行為するとき、周囲の人々のあいだの威信関係とそこでの彼の位置について明確に認識することが不可欠である。この要請との関連で、首長は臣民のあいだの威信関係の組織者として登場する。

大人へと社会的に通過した臣民は、そのアイデンティティの名辞であり、同時にその社会的威信の公的な指標としても機能する称号をあたえられる。そして、この称号を独占的に掌握し、操作するのが最高首長である。この称号の体系ゆえに、社会的相互行為は行為者の称号（その威信）におうじて制御されることになる。このことは、臣民の社会生活が一般に最高首長によって、あるいは臣民と最高首長との関係によって、統合されていることを意味する。

ポーンペイの称号の体系については、名誉と威信の経済学を語ることができる。最高首長は臣民の威信をすべて一旦独占し、あらためて臣民のあいだに再分配し、臣民を序列づけているからである。経済の言葉によるこのいいかえが示唆するように、名誉と威信の世俗的なイデオロギーは、本来の経済的行為をも取り込んで変容させる。臣民が最高首長にたいしておこなういかなる経済的寄与も、後者にたいする表敬行為として編成されるのである。とりわけ祭宴は経済的であると同時に表敬的行為である。経済的に、祭宴は大量の食物を集積し、そして再分配する機会である。主催者は集めた食物を主客に献上し、主客はその食物を全参会者に再分配する。これら食物の経済的交換は同時に、主催者と主客とのあいだの名誉のゲームでもあり、この一面は祭宴を構成する実行行為の形式的な側面で象徴的に実現される。祭宴の物的規模とそれに見合った形式的なしつらえは、主催者が主客に払う敬意の指標であり、かつ主催者が見返りに得る名誉の指標でもある。人々は通常、婚姻、死、その他の人生上の主要な結節点に、最高首長を招聘し、祭宴を催すことによって対処する。人々が人生上の出来事を祝うということは、つまり彼らの人生を生きることにはかならない。世俗的イデオロギーは臣民の生活に介入して、臣民がそれを生きることにおいて、不可避免的に最高首長の権威を承認し支えるべく、構造化しているのである。要約すれば、ポーンペイ社会は集中的形態がそなえる経済的、イデオロギー的要素を十全に活用した首長制システムを構成しているといえよう。

### (3) 領土の分散したマーシャルの首長制<sup>9)</sup>

マーシャルとコシャエの首長制は、首長制のポーンペイ的構成の変異形態として解

9) マーシャルの民族誌的資料は Mason [1947], Tobin [1952], 清水 [1987b] によった。



積することができる。

マーシャルは土地制度、名誉と威信のイデオロギー、首長位の宗教的表現など、首長制の主要な特徴をポーンベイと共有している。経済的に、首長の地位はもっぱら土地制度の言葉で定義される。この経済的原則に従うという点で、マーシャルのシステムはより徹底している。一次的地権を持つものは、土地の数の多寡にかかわらず、等しく「最高首長」(*irooj laplap*)位を構成し、二次的地権者は同時に同最高首長に支配される「平民」(*kajoor*)でもある。いずれの地権も、特定の母系リネジの集合的な権利であり、一人の代表者によって集中的に管理される。ただし、この代表者の権限は強く、いずれの地権も代表者の個人的な専権と見做すことも不可能ではない。一次的地権を代表して行使するのが最高首長であり、一次的地権を保有する母系リネジ内で最高位にある男ないし女がこの地位を継承する。

二次的地権を保有する母系リネジは、地権をもっている土地に生活の本拠をおくことができる。居住様式は妻方を原則とするので、理念的にリネジ成員とその男子婚入者が集住するはずであるが、実際には、地権を保有するリネジの成員を主体に、かれらの(直接的、間接的)キンドレッドが寄留して生活集団、家を構成する。最高首長は一次的地権を保有する土地と、二次的地権の代表者、および当該土地に住む家の成員とを支配する。最高首長に属す土地が連続的な領域を構成するとは限らない。ことにラリック列島では、4人の最高首長が併立し、しかも彼らの領地が同じ列島の範囲内に展開しているという、特異な政治模様がみられる。この特徴的な領土の形態を除けば、マーシャルの首長はポーンベイの首長とほとんど同じ統治的、イデオロギー的役割を演じている。

#### (4) コシャエの専制的首長制<sup>10)</sup>

コシャエ島の面積はポーンベイの約3分の1であるが、かつては一人の君主のもとに支配されていた。コシャエとポーンベイの政体はほぼ共通のデザインのもとに構成されていたと見ることが可能であるが、その上で、コシャエはより厳しく首長階層と平民とを峻別していた。コシャエの家士は称号を付与された首長のみから登用され、それゆえ家士は平民にたいし封建領主の位置にあり、決して後者の同等者ではなかった。王、副王、その他の首長は特定の貴族的リネジのみに属した。彼らと平民との通婚は禁止されてはいなかったが、かかる結合からうまれた子供は称号の付与された首

10) コシャエの民族誌的資料は Sarfert [1920], Wilson [1968], および筆者による実地サーヴェイのデータによった。コシャエの事例も民族誌的現在の時制で表現すべきであるが、この島の伝統的政治体系のみは、すでに崩壊して久しく、現在の政治組織にほとんど何の痕跡も残していないので、過去形で記述する。

長位からは排除された。最高首長と貴族たちはレラ島に集住した。レラ (Leluh) 島は本島に近接した小島で、都城化されており、耕地はほとんどない。換言すれば、最高首長と貴族たちは有閑階級を構成したのであり、臣下に課した貢納によってのみ生計を立てていた。

コシャエの政体はポーンペイとはほぼ同じ世俗的イデオロギーに基礎をおいていた。名誉と威信のイデオロギーはコシャエ社会でも機能し、ポーンペイの作法体系に匹敵する言語的、行動的表敬システムを構成していた。ポーンペイとの差異は宗教的イデオロギーにみられ、それはコシャエ最高首長に強力なマナを付与して、その専制的権力を支えていたと見られる。

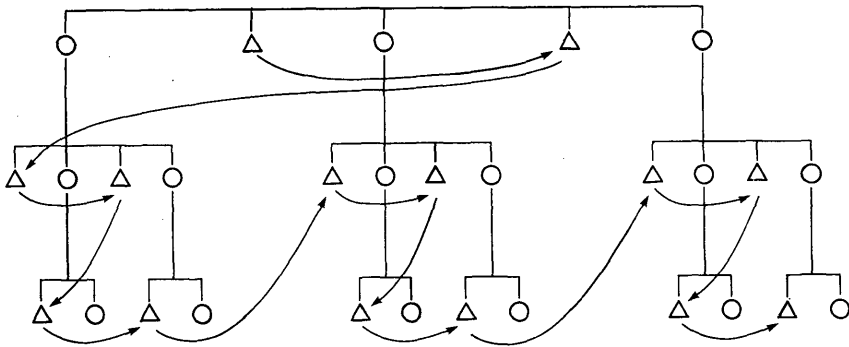
(5) トラック・ポーンペイ・マーシャルの親族集団と北部ギルバートの首長制

マキンおよびブタリタリ2島からなる北部ギルバートの政体<sup>11)</sup>は、後述する親族構成上の特徴をのぞけば、ポーンペイ首長制と構造的に類似している。首長国は10の村落からなり、その全体を統治する最高首長 (high chief) は村落から超越している。最高首長は首長国の領土全体にたいし、ポーンペイ首長と同様の一次的地権をもち、そのゆえに、臣民より食物の——やはり象徴的・表現的な——貢納をうける。最高首長位にかかわる親族構成は父系出自によっており、長男子による継承が原則であった。他方、臣民は家ごとに生計の単位をなし、家は村落へと組織されている。最高首長のキョウダイ (多くは実の兄弟) を祖とする家は貴族、このような系譜を主張しえない家は平民とされる。生計を支える家産 (estate) である土地について、再び二重の地権が構成される。家産としての土地の過半は、貴族の家が残余権、平民の家が財産権をそれぞれ保有する。さらに双方の家が一戸の家屋に共住する例も多い。臣民と最高首長とを媒介するのは村落の会議とそれを代表する村長であるが、村会議には村内の土地に残余権を持つ家が代表者を出席させる。ここで用いた「残存権、財産権」は、当事者のあいだではそれぞれ一次的、二次的地権、しかし最高首長との関係ではそれぞれ二次的、三次的地権と見做すべきものである。

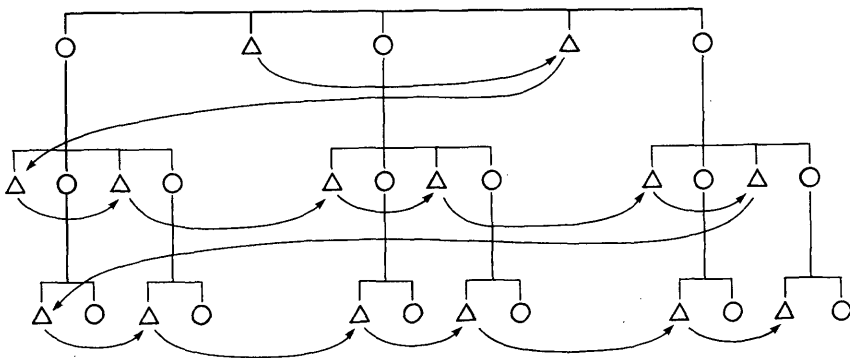
北部ギルバートの社会を構成する家については、ポリネシアの例に近似する複系 (ambilineal descent) 出自が強調されてきた [LAMBERT 1966a]。社会の中心部は、最高首長の継承に代表される父系出自で構成されるが、その他の部分では、貴族、平民いずれの家も、家産たる土地を耕作し、共住する者を中核的な成員とし、これに他出者・その双系子孫が二次的成員として加わる二重構造をとっている。傾向として夫方=父方居住が多く、それゆえ家は父系に傾斜した複系、つまり準父系的複系出自に

11) 北部ギルバートの民族誌的資料は Lambert [1966a, 1966b, 1971] によった。

よっている。最高首長の家は世代の更新ごとに分岐する分節を貴族の家として分離するので、それ自体は末広りの分節構造をなさない。しかし視野を広くとってみれば、最高首長とその継承ラインの子孫にあたる貴族の家々とは全体として、出自集団でありながら、内部が層序化されており、この点でいわゆる「円錐クラン」[SAHLINS 1968]に該当する。このような北部ギルバートの親族構成は、総じて母系的傾向の顕著な中央・東ミクロネシアにあっては例外的であり、文化史的にポリネシアとの近縁関係が予想されるところである。しかし、中央・東ミクロネシアとまったく連続性が読みとれない訳ではない。



(1) ポーンペイ



(2) マーシャル

(2つの事例の差異を明示するため男  
についてのみ優先順位を記入した。)

図2 母系リネジの成員間における優先順位

トラック、ポーンペイ、マーシャルの親族は母系出自を基本とし、家は母系リネジを主体に構成されている。いずれの地域においても、家は準母系的親族などを成員として含みこむ構造をそなえていたことに留意したい。首長位はこの母系リネジ内で継承される。ただし、地位の継承順に代表される集団内の地位の差異の様相は地域によって異なる。トラックが成員間の地位の差異を極小にとどめ、年齢順のみによるきわめて平等的なシステムを採用しているのに対し、ポーンペイは地位の差異を拡大し、系統を分化させるシステムをとっている。つまり姉妹のそれぞれの子孫のあいだでは、姉の子孫はすべて、世代にかかわらず、妹の子孫すべてより上に位置づけられる。母方オジと姉妹の息子などのように、この基準で差異の生じない関係では、上の世代のものの方が上位に位置する。このポーンペイの母系リネジにおける内部の層序化の方法は上記の「円錐クラン」と同じであって、その母系出自版ともいべきものである。優先順位の構成には女性も算入されるのに対し、王位などの政治的地位の継承からは女性はすべて排除される。

他方、マーシャルのリネジは成員全体を世代ごとに層化したうえで、ポーンペイと同じ基準で系統に差異をもうけている。ポーンペイよりは平等的、しかしトラックよりは系統を重視した折衷的システムである（図2）。マーシャルでは政治的地位の継承から女性は排除されないが、地位によって女性の参与の仕方が異なる。最高首長位については、同じ世代のなかで、すべての男がすべての女より優先する。しかし、現実には女性の継承権はしばしば無視されたようである。平民における二次的地権の代表権については、女性の権利は強く、男女の差はなく、同世代の同母シブリングのあいだでは純粋に年齢順に継承順位が構成された。

#### IV. 結 論

本稿では、首長制の2つの対照的な形態を参照しつつ、ミクロネシアの諸政体を分析的に概観した。「同等者中の第一人者」を戴く首長制は、平等制と階層制とのユニークな結合のうえに成り立っていた。ベラウとヤップでは、同等者のあいだの競争による首長的地位の複合的な構成を観察した。それはミクロネシア以外の地域では類例を見出しがたいシステムであるように考えられる。いまひとつの形態である集中的首長制は、首長制の構成要素を経済・イデオロギーいずれの面でもきわめて可視的に提示しており、「首長制」概念の典型とみることができる。サーリンズはポリネシアの社会組織について2類型を識別し、この2類型の差異が生ずる要因を、社会の位置す

る島の生態的条件に求めた [SAHLINS 1957]。アルカイアも同様に、ミクロネシアにおける社会的特徴の諸変異が環境条件の差異と相関することをしめそうと試みている [ALKIRE 1960]。しかしながら、本稿で提示した首長制の2つの形態は、生態条件と相関するとは考えられない。いずれの形態についても、それにもとづく首長制社会が、オセアニアにおける島々の地理的・生態的条件のうえでもっとも対照的な火山島と珊瑚島の双方に見出されるからである。他方、ミクロネシア周辺の首長制社会と比べるならば、ミクロネシアの首長制は、2つの形態のいずれに属すものであれ、首長と臣民のあいだの政治的関係が、双方のあいだの特定の親族・姻族関係に依拠することを不可欠の条件とはしていないという点で特異である<sup>12)</sup>。この特徴を強調するならば、ミクロネシア諸社会は首長制の純粋に政治的な構成を例示しているというべきであらう。

## 引用文献

- ALKIRE, W. H.  
 1960 Cultural Adaptation in the Caroline Islands. *Journal of Polynesian Society*, 69: 123-150.  
 1965 *Lamotrek Atoll and Inter-island Socioeconomic Ties*. Illinois Studies in Anthropology 5, Urbana: University of Illinois Press.
- 青柳真智子 (AOYAGI, Machiko)  
 1982 The Geographical Recognition of Palauan People. In M. Aoyagi (ed.), *Islanders and Their Outside World*, Tokyo: St. Paul's (Rikkyo) University, pp. 3-33.  
 1986 「Bitang ma Bitang (二つの半分), Eual Saus (四つの角) および機構的混乱——パラオ政治社会構造の一考察」ミクロネシア研究委員会 編『ミクロネシアの文化人類学的研究——西カロリン群島の言語・社会・先史文化』国書刊行会, pp. 209-274.
- BLUST, R.  
 1981 Dual Division in Oceania: Innovation or Retention. *Oceania*, 52: 66-79.
- EHRlich, P. M.  
 1978 "Clothes of Men": *Ponape Island and German Colonial Rule*. Ph. D. dissertation, State University of New York.
- GOODENOUGH, W. H.  
 1966 *Property, Kin, and Community on Truk*. Hamden, Conn.: Archon.
- KAEPPLER, A. L.  
 1971 Rank in Tonga. *Ethnology* 10: 174-193.
- KRÄMER, A.  
 1919 *Palau*. Teilband 2. In G. Thilenius (hrsg.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition, 1908-1910*, Band 3. Hamburg: L. Friederichsen.

12) ミクロネシア外における比較対象として明示的なものを挙げれば、メラネシアのトロブリアンド [MALINOWSKI 1932; POWELL 1960], フィジー [SAHLINS 1986], ポリネシアのトンガ [KAEPPLER 1971], 東南アジアのカチン [LEACH 1964] などの首長制があるが、これらの首長制はいずれも、臣民とのあいだに特定の血縁ないし姻族関係を結ぶことが、首長位の権威を支える必要条件の一つとなっている。

- LAMBERT, B.  
 1966a Ambilineal Descent Groups in the Northern Gilbert Islands. *American Anthropologist* 68: 641-664.  
 1966b The Economic Activities of a Gilbertese Chief. In M. J. Swartz, V. Turner, and A. Tuden (eds.), *Political Anthropology*, Chicago: Aldine, pp. 155-172.  
 1971 The Gilbert Islands: Micro-individualism. In R. Crocombe (ed.), *Land Tenure in the Pacific*, Melbourne: Oxford University Press, pp. 146-171.
- LEACH, E. R.  
 1964 *Political Systems of Highland Burma: A Study of Kachin Social Structure*. London: Athlone Press.
- LESSA, W. A.  
 1950 Uliith and the Outer Native World. *American Anthropologist* 52: 27-52.
- LINGENFELTER, S. G.  
 1975 *Yap: Political Leadership and Culture Change in an Island Society*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- MALINOWSKI, B.  
 1932 *Sexual Life of Savages in North-western Melanesia* (3rd ed.). London: Routledge & Kegan Paul.
- MASON I. K.  
 1947 *The Economic Organization of the Marshall Islanders*. Honolulu: U. S. Commercial Co., HRAF Files, OR11 Marshalls, Source No. 20.
- OBAYASHI, Taryo  
 1987 Statistical Classification of Cultures of Southeast Asia and Oceania. *Man and Culture in Oceania* 3 (Special Issue): 157-168.
- PARMENTIER, R. J.  
 1984 House Affiliation Systems in Belau. *American Ethnologist* 11: 656-676.
- POWELL, H.  
 1960 Competitive Leadership in Trobriand Political Organization. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 90: 118-145.
- RIESENBERG, S. H.  
 1968 *The Native Polity of Ponape*. Smithsonian Contributions to Anthropology 10, Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- RIESENBERG, S. H. and A. H. GAYTON  
 1952 Caroline Island Belt Weaving. *Southwestern Journal of Anthropology* 8: 342-375.
- RITZENTHALER, R. E.  
 1954 *Native Money of Palau*. Milwaukee Public Museum Publication in Anthropology 1, Milwaukee: Milwaukee Public Museum.
- SAHLINS, M. D.  
 1957 Differentiation by Adaptation in Polynesian Societies. *Journal of Polynesian Society* 66: 291-300.  
 1968 *Tribesmen*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.  
 1986 The Stranger-King, or Dumezil among Fijians. In M. D. Sahlins, *Islands of History*, Chicago: University of Chicago Press, pp. 73-103.
- SARFERT, E.  
 1920 *Kusae*. Teilband 2. In G. Thilenius (hrsg.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition, 1908-1910*, Band 4. Hamburg: L. Friederichsen.
- SERVICE, E. R.  
 1962 *Primitive Social Organization: An Evolutionary Perspective*. New York: Random House.
- 清水昭俊 (SHIMIZU, Akitoshi)  
 1982 Chiefdom and the Spatial Classification of the Life-World: Everyday Life, Subsistence and the Political System on Ponape. In M. Aoyagi (ed.), *Islanders and Their*

- Outside World*. Tokyo: St. Paul's (Rikkyo) University, pp. 153-215.
- 1985 「出自論の前線」『社会人類学年報』11: 1-34.
- 1987a Feasting as Socio-Political Process of Chieftainship on Ponape. In I. Ushijima and K. Sudo (eds.), *Cultural Uniformity and Diversity in Micronesia*. Senri Ethnological Studies 21, Osaka: National Museum of Ethnology, pp. 129-176.
- 1987b Kinship-based Groups and Land Tenure on a Marshallese Atoll. In E. Ishikawa (ed.), *Cultural Adaptation to Atolls in Micronesia and West Polynesia*. Tokyo: Tokyo Metropolitan University, pp. 19-41.
- 1987c 『家・身体・社会——家族の社会人類学』 弘文堂。
- 須藤健一
- 1984 「サンゴ礁の島における土地保有と資源利用の体系——ミクロネシア・サタウル島の事例分析」『国立民族学博物館研究報告』9 (2): 197-348.
- 杉浦健一
- 1938a 「パラオ島民の社会組織」『民族学研究』4 (1): 49-71.
- 1938b 「パラオ島に於ける聚落の二分組織に就いて」『人類学雑誌』53 (3): 105-115.
- TISCHNER, H. (hrsg.)
- 1959 *Völkerkunde*. Frankfurt am Main: Fischer.
- TOBIN, J. F.
- 1952 Land Tenure in the Marshall Islands. *Atoll Research Bulletin* 11: 1-36.
- 牛島 巖
- 1987 『ヤップ島の社会と交換』 弘文堂。
- WILSON, W. S.
- 1968 *Land, Activity and Social Organization of Lelu, Kusaie*. Ph. D. dissertation, University of Pennsylvania.